

水の音
おと

ナガイヒデミ

登場人物（いずれも五〇歳）

宗内敦志（むねうち あつし）

並木楓太（なみき ふうた）

田島奈津（たじま なつ）

第一場

ある東京近郊の町。夜。

駅の近くのカフェ「滯」（みお）の店内。ここは店長兼オーナーの宗内敦志が一人で切り盛りする店である。半地下にあり、舞台上手寄りに階段、それを上がったところに通路（廊下）がある。通路の上手側は店の入り口に、下手側は敦志の部屋に通じているらしい。通路の上には窓。

上手から舞台中央にかけてテーブル席がいくつかあり、下手寄りにカウンター席。灯りは絞ってあり、どことなく水の底を思わせる店内。時おり水滴の落ちる音がしている。

夜は電車や踏切の音も入ってくるが、そううるさくはない。

敦志はカウンター席に両肘をつき、頭を抱える格好で座っている。通路の上手側、入り口のドアを開けて並木楓太が入ってくる。黒いスーツに営業靴。階段を下りる楓太。敦志、振り向かず、声をかける。

敦志 終わったんか。
楓太 ああ。

楓太、手近なテーブル席の椅子に営業靴を置き、その横の椅子にどすんと腰をかけ、黒いネクタイを緩める。上着を脱いで、靴を置いた椅子の背に放るように掛ける。

敦志、振り向いて、

敦志 奈津は。
楓太 先に行つとつてくれ、て。
敦志 何で。
楓太 電話せないかんで。
敦志 どこに。
楓太 高校。あいつの勤め先。
敦志 何で。
楓太 何かややこしげな事件起こつたて。
敦志 え。
楓太 補導されたらしい、生徒が。
敦志 ああ。
楓太 さつきもちよつと遅れてきたし。
敦志 寄るんじやろ、ここには。
楓太 そう言いよつたけど。

楓太、シャツの上の方のボタンをはずすと、営業鞆から扇子を出しぱたぱたあおぐ。

敦志 どうじゃった。
楓太 どうて。

水の音。

敦志 いや。

敦志、目を伏せて立ち上がり、カウンターの中に入る。
コーヒーを淹れながら、

敦志 すぐにわかったか、ここ。
楓太 ああ。駅の裏側じゃて、奈津が。
敦志 何年振りじゃ。
楓太 何が。
敦志 お前と会うんは。
楓太 一〇年と五カ月半。
敦志 えらいよう覚えとるの。
楓太 来てくれたろ、お前。お袋の葬式の時。
敦志 ああ。もうそがになるか、あれから。

楓太 わざわざ村に戻って。うちの寺に。

敦志 お袋さんには世話になったけんの。お前とこに遊びに行くたんびに、うまいおやつ食わしてもろた。

敦志、カウンターを出て、敦志の前にコーヒーを置く。

楓太、敦志を見上げながら半ば無意識にコーヒーカップを口に運ぶ。

楓太 あつつつつつ。

敦志 慌てもん。相変わらずじゃ。

楓太 コーヒーが熱すぎるんじゃ。

敦志 当たり前じゃろ。淹れたてじゃ。

楓太、敦志の顔を見ている。

敦志 どうかしたか。
楓太 いや。

水の音。

コーヒーをすすする楓太。ぼそっと、

楓太 ふう。

敦志 何ぞ。

楓太 旨いの。

敦志 ほうか。

敦志、カウンターの椅子に座る。
水の音。

楓太 何年になるんじゃ。

敦志 ほじゃけん一〇年と五カ月半じゃろ。

楓太 いや、お前の、この店。

敦志 十五年と七か月と十日。

楓太 お前こそよう覚えとるの。

敦志 自転車操業じゃけん、毎日。

楓太 ずっと一人か。

敦志 まあ、の。変わり映えせんよ。そっち

は。

楓太 また生まれた。

敦志 猫か。

楓太 なんじゃ。赤ん坊。

敦志 またか。

楓太 またか、はないじゃろ。

敦志 いつ。

楓太 っ、ふた月ほど前。この歳で、な。

と、頭をかく。

敦志 なんぼじゃった、歳。

楓太 は。ワシらは滯（みお）中水泳部の同

期じゃ。

敦志 ばか。奥さん。

楓太 五つ下。

敦志 四十五か。

楓太 何じゃ。

敦志 いや。オメデトウ。

楓太 ああ。おおごとじゃけど。

敦志 何が。

楓太 生むんも。育てるんも。

敦志 お前が生んだわけじゃないじゃろ。

楓太 ほうじゃけど。おしめ替えたり風呂入

れたり。

敦志 お前がか。

楓太 ワシじゃやてるぞ、それぐらい。

敦志 ほー。

楓太 夜中に泣くしの。

敦志 猫か。

楓太 ばか。赤ん坊。

敦志 ああ。

楓太 嫁さんは平気でぐうぐう寝よるけど。

敦志 疲れとるんじゃろ、昼間。

楓太 まあな。ちびが四人にもなるとな。

敦志 なんぼになった。今年。

楓太 ほじゃけん嫁さんは四十五。

敦志 子ども。

楓太 上は中学生で二番目は小学校の四年。

下は幼稚園。

敦志 何ぞ。にやにやして。

楓太 小そうて、な。

敦志 は。何が。

楓太 赤ん坊。

敦志 ああ。

楓太 ミューより小さいくらいじゃ。

敦志 ミュー。

楓太 猫じゃ。うちの。

敦志 比べるか。猫と。

楓太 かいらしいぞ、うちの猫。黒くてでかくて。

敦志 どこがかいらしいんじゃ。

楓太 しがみついてくるんじゃ。

と、何かにすがりつくような格好をする。

敦志 うわっ。猫がか。

楓太 赤ん坊。こう、抱っこしてやると、な。

敦志 ああ。

楓太 温こうてな。

敦志 子どもは体温高いんじやろ。

楓太 醒めとるな、お前。

敦志 フツーそこまでアツなるか。上に三人もおるのに。

楓太 子どもが生まれる度に、な。

敦志 うん。

楓太 あれ、上の子もこんなに小さかったんじやろか、と思うわけよ。

敦志 ほうか。

楓太 信じられるか、お前。

敦志 何。

楓太、ポケットから男物の大判ハンカチを出す。

楓太 生まれたてなんか、これで包めるくらい小さいぞ。

敦志 まさか。猫じやろ、それは。

楓太 いや、だいたいこんなもんじゃ。

と、ハンカチを広げ、右手で左の首から下に巻き付ける。右手で左腕を抱えるようにして、

楓太 おーよしよし。
敦志 ばか。

楓太、コーヒーをすすする。水の音。

楓太 なあ。

敦志 何ぞ。

楓太 あるんじゃるか、今でも。

敦志 何が。

楓太 あっこ（あそこ）のパーマ屋。濤農協の斜め前にあつたろ。

敦志 忘れた。どうかしたか、それが。

楓太 昔な。小学校の頃、お袋に連れて行かれて。シャンプー用の椅子に寝さされて。

若い子おつたる。修行中の。助手ゆうか、弟子ゆうか。

敦志 知らん。ワシはいつつも散髪屋じゃ、よろず屋の向いにあつた。

楓太 その若い子が髪を洗（あろ）てくれるんよ。

敦志 そら髪を洗うんは助手の仕事じゃ。

楓太 こう、迫ってきての。ぼよよーんと。

敦志 は。

楓太 おっぱいが。ワシの顔に。

敦志 裸で客の髪洗いよつたんか。

楓太 まさか。パーマ屋じゃ。

敦志 ああ。

楓太 ぴたぴたのTシャツにラインくつきり。

敦志 普通目えつむるもんじゃ。

楓太 ええ匂いがして。くらくらした。

敦志 そいで。

楓太 そんだけ。

敦志 しょうもなー。

楓太 お袋にまた連れて行けとも言えず。前通るたんびに匂い嗅いだ。

敦志 ほんとにしょうもなー。

楓太 覚えてないか。農協の斜め前じゃ。

敦志 あの、まさみ、とか、ひさみとかいう

看板が出とったあそこか。

楓太 ナオミ美容室。

敦志 よう覚えとるの。

楓太 娘の名前。

敦志 は。

楓太 ナオミで名あ付けた。今度の、四番目。

敦志 あ、そ。

敦志、カウンターのの中に入ってグラスを磨き始める。
水の音。

楓太 何で会社やめたんじゃ。東京で就職しとったんじゃろ。

敦志 お前は何でやめんのじゃ。

楓太 ワシは。生活があるし。

敦志 それはあるぞ、一人でも。

楓太 退屈じゃないか。毎日。

敦志 何で。

楓太 都内とはいえこんなはずれの町におつて。毎日コーヒー淹れて。

敦志 別に。

楓太 何か、こう、欲しないか。刺激。

敦志 お前じゃないか、退屈しとんは。

楓太 いや、まあ。満足はしとるよ、それなりに。

敦志 ふん。

楓太 ほじゃけど何か、な。

敦志 何ぞ。

楓太 ちよっと落ち気味じゃし。営業成績。

敦志 ああ。

楓太 上司はがみがみ言うし。売れんときは売れんのに。

敦志 そらそうじやる。

楓太 このごろ妙に、な。

敦志 うん。

楓太 会社の若い子おらがきれえに見えて。

敦志 は。そうくるか。

楓太 ちよつと、な。

敦志 危ないぞ。

楓太 まあ、別に。それほどあれでもないん

じゃけど。

敦志 ああ。

楓太 ほじゃけど、何か、の。

楓太、少し声を潜めて

楓太 お前、してみたないか。大恋愛。

敦志 何ぞ、急に。

楓太 ワシはしたい。今、大恋愛がしたい。

と、わめく。

敦志 したけん、今四人じやる、子どもが。

楓太 それはまあ、成り行きで、の。

敦志 (軽く) 疲れとるんとちがうか。

楓太 疲れとるよ、いつでも。

敦志 いっぺん検査でもしてみたら。

楓太 いや。寝不足とかストレスとか言われ

るだけじゃろ。

水の音。

敦志 スーパーで売りよるの、お前とこの会

社の。

楓太 まいど。

敦志 買ったことないけど。

楓太 薄情もん。

敦志 菓子パンは好かん。

楓太 ふつうの食パンもあるぞ。菓子も。

敦志 ココナツ味は好かん。

楓太 「椰子の実」はただの社名じゃ。

敦志 株式会社「椰子の実パン」。全部ココナツが入っとんじやないんか。菓子もパンも。

楓太 全部じやないワ。ほれ、今売り出し中の新製品。

と、鞆から菓子の袋を取り出し、立ち上がってカウンター越しに敦志に渡す。

楓太 自信作じや。

敦志、いちおう手に取ってみる。袋を裏返して、材料表示を見て、

敦志 やっぱり入っとるじやないか、ココナツ。

楓太 ま、看板みたいなもんじやけん、うちの。

敦志 お前が作ったんか。

楓太 まさか。ワシは営業一筋じや。

敦志 前から思いよったけど。

楓太 何じや。

敦志 変わった社名じやの。

楓太 会社起こした先々々の社長が。

敦志 ココナツに目がなかった、とか言うんじやろ。

楓太 兵隊に取られて南方にやられて。部隊が全滅してジャングルに逃げ込んで。

敦志 「椰子の実」で命繋いだ、とか。

楓太 そういう噂もあつたけど。

敦志 何じや。

楓太 実はその社長の奥さんが。

敦志 は。

楓太 好きじやつた、いうことじや。

敦志 ココナツが、か。

楓太 歌。

敦志 歌。何の。

楓太 (朗々と暗唱)「名も知らぬ遠き島よ

り、流れ寄る椰子の実一つ」*

敦志 ああ。て、節つけて歌え。

楓太 「故郷（ふるさと）の岸を離れて、汝（なれ）はそも波に幾月」*

敦志 ええけん、もう。

楓太 音痴じゃし。ワシ、ものすごう。

敦志 そういや。

楓太 ほれ、これがうちのシンボルマーク。

手を伸ばして菓子の袋を指差して
見せる。

敦志 ラグビーボールがごろんと一個。

楓太 ココナツじゃ。

敦志 うーん。

楓太 どうじゃ、一つ。新製品。

と袋を開け、中のビスコッテイを一
つ敦志に差し出す。

敦志 クツキーか。

楓太 ビスコッテイじゃ。

敦志 ビスケット。

楓太 ビスコッテイ。

敦志 同じじゃろ。

楓太 違う。

敦志 ココナツの味は口に合わん。

敦志、結局手に取らず、グラス磨き
に戻る。

楓太、元の椅子に戻り袋をテーブル
の上に置いて、

楓太 ま、それも一つの意見じゃな。末端消
費者の。

敦志 まったん消費者。

楓太 最末端じゃ。

敦志 何じゃ、それ。

楓太 海渡った四国くんだりの、ちんまい町
からまだ車を三〇分も山の方に走らさな

着かんような村出身のものことじゃ。
敦志 は。高校出て村離れるまで、ワシら二人ともずうっとおんなじ濡村村民じゃ。

水の音。

敦志 しばらく帰ってないんじやろ。家。

楓太 まさか。子ども四人もおるのに。

敦志 いや。お前の実家、本道寺に。

楓太 ああ。うん。もう親もおらんし。

敦志 帰りづらいか。

楓太 別に。弟とはように話したし。

敦志 押し付けたんじやろ、跡取りを。

楓太 嫌じゃったんじや。村は。

敦志 小学校も中学も村に一つだけ。三代、

楓太 四代遡ったら、そこら中が親戚どおし、か。

敦志 どこに遊びに行っても、お寺の跡取り、

言われて。思い切り暴れることもできんし。

勉強ができてもできいでも何か言われる。

女の子おと付き合うんも。

敦志 ははーん。

楓太 何ぞ。

敦志 保育園の頃はサチコにミユキ、小学校

に入ったらマミとユリ、二つ下のハナエ、

中学校に上がったらすぐ一つ上のカスミ

先輩、か。

楓太 う。

敦志 ようもまあ。

楓太 違う。

敦志 何が

楓太 誤解じゃ。その。ユリとハナエは。

敦志 はん。

楓太 ま、かわいいもんじやろ。付き合うゆ

うても手えつなぐくらいのことじゃ。

敦志 ふん。

楓太 お前こそ。

敦志 ワシは別に。

楓太 どこに行っても言われよったろ。

敦志 何。

楓太 産婆さんこの子、て。

敦志 ああ、

楓太 屋号みたように。

敦志 ひいばあちゃんから三代続いた産婆
じゃけんの。まあ、しゃーない。

楓太 お袋さん、元気か。

敦志 なんとか。

楓太 もう引退か。

敦志 とつくじゃ。

楓太 今はみいな病院で生むけんの。

敦志 うん。

楓太 昔は、じいさんも親父もおれらも、村
中の者（もん）がお前とこに取り上げても
ろた。あれ、お前は。

敦志 え。

楓太 産婆さんが赤ん坊産むときは、誰が取

り上げるんじゃ。

敦志 そらばあちゃんに決まっとらい。

楓太 ああ。

風が窓を揺らす音がたがたという音。
敦志、カウンターを出て階段を上り、
通路に立って窓のブラインドを下
ろす。通路の手すりを持ち、下に向
かって、

敦志 まだあるんじやろ。

楓太 何。

敦志 お前の名づけ親。

楓太 名あつけたんは親父じゃ。

敦志 木偏に風、楓（かえで）ちゅう漢字で
楓太、か。

楓太 何ぞ、今さら。

敦志 三〇〇年いうたか。

楓太 は。

敦志 樹齡。本道寺の、山門脇の楓の木。

楓太 ああ。そう言いよったけど、家の者も
よう知らんのじゃ。

敦志 よう上ったの、ガキの頃。

楓太 ああ。

敦志 遠くの家や田んぼまで見えるんが面白うて。

楓太 寺が高いところにあるけん。ま、木の上から見渡せる程度の村、つちゆうこっちゃ。

敦志 泣いたことがあったの。一回、奈津が。楓の木の上で。

楓太 泣く。あの奈津が。まさか。

敦志 はじめて高いところまで上ったはええけど、下見たら急におとろしなって、下りれんようになったんじゃ。

楓太 忘れた。いつ。

敦志 小学校の一年か、二年か。ワシらは先下見たら、足がすくんだらしい。

楓太 上るんは何ともなかったんか。

敦志 ほうじゃて。

楓太 ほいで、どしたん。大人に助けてもらたんか。

敦志 お前が、も一回上って一緒に下りてやったんじゃ。

楓太 忘れた。

敦志 あいつ泣きもてフータ、フータいうて。

楓太 は。泣く。あの奈津がか。

敦志 ばかばかばか、フータの大ばか、て。

敦志、階段を下りて椅子に腰かける。

敦志 今頃じゃの。新芽の出始めるんは。

楓太 え。

敦志 楓の木。

楓太 ああ。

敦志 そいでプールの大掃除じゃ。

楓太 えらい話が飛ぶの。

敦志 藻や蛾の死骸なんかが浮いた汚い水抜いて。

楓太 デッキブラシでゴシゴシ、か。

敦志 お前、いつも女の子に何かちよっかい出しよったじゃろ。

楓太 ちよっかい。

敦志 水かけたり、デツキブラシでつついた
り。

楓太 ワシ、そこまでガキじゃなかったぞ。
敦志 いっつも奈津が怒って、ブラシ振り上
げて追わえよった。ばかばかばか、フータ
の大ばか、言うて。

楓太 忘れた。
敦志 嘘つけ。

楓太 四月は冷たかったの、水。

楓太 ああ。震え上がった。

敦志 二〇分も泳いだら唇紫色になった。

楓太 甘うて、うまかったの。

敦志 飛んだぞ、話が。

楓太 沙希江が作ってきてくれた。保温ポツ
トに入れて。

敦志 ああ。ミルクティ。

楓太 特別の味じゃったの、何か。

敦志 一番安いティーバッグ使いよったは
ずじゃけど。

楓太 何であなに旨かったんじやろ。

敦志 風も冷とうて、体中さぶいぼ立ったけ
ん。

楓太 ミルクティが沁みる。口、喉、食道、
胃。順番に温もってくる。あの感じ、忘れ
られんな。

敦志 うちの紅茶も勝てん、あれには。

楓太 五臓六腑に沁みわたる、っちゅうか。

敦志 あなに切実にものを口にする、て、な
いな。最近。

楓太 二日酔いの朝いちばんに飲む水道水。
敦志 ばかばかばか、楓太の大ばか。

と、両手のこぶしでぼこぼここと楓太
をぶつ真似。

楓太 何じゃそれ。

敦志 奈津がようしよった、昔。

楓太 やめい、気色悪い。

水の音。踏切の音。

楓太 泳ぐことあるか、最近。

敦志 お前は。

楓太 わかるじゃろ。この腹見たら。

立ち上がったって敦志の方に近寄りシャツをまくる。腹をポンポンと叩いたりする。敦志、楓太の腹の肉をつまむ。

敦志 わ。ちよつとは泳げよ。

楓太 忙しいて。お前こそ。

敦志 ワシは別に。メタボじゃないし。

楓太 ほっとけ。

と、座り直す。

敦志 ほじゃけど信じられへんの。

楓太 何が。

敦志 ワシら一日四千も五千も泳げたんじ

や、あの頃。

敦志 五キロ。

楓太 半分も無理じゃ、今は。

敦志 二、三百メートルじゃろ、せいぜい。

楓太 二、三〇メートルかも知れん。

敦志、カウンターの上の水差しを取って、楓太のコツに水を注ぐ。
水の音。

敦志 潜水の競争したことあったの。

楓太 ああ。三年の。いつじゃ。

敦志 シーズンの終わり。引退する直前。

楓太 ワシが勝ったんじゃろ。

敦志 ワシに決まっとる。水泳では勝てんかったけど。

楓太 潜水も相当いけたぞ、ワシ。賭けんかったか、なんか。

敦志 ああ。西瓜。こう、大けな。(と、身

敦志 振り。)

敦志 沙希江と奈津が買うて、うずんで（運んで）来たんじゃ、農協から。

楓太 そいでワシが獲得したんじゃ。

敦志 勝ったんはワシじゃ。二回折り返して六〇メートル。息止まりそうになつた。

楓太 いや、プールで西瓜食べたん覚えとるぞ、ワシ。三年の夏に。

敦志 結局皆で分けたんじゃ、西瓜は。

楓太 いんや。二回折り返して三回目タッチするとこまでいったぞ。

敦志 潜水で七十五メートルか。ありえんじやろ、中三の肺活量で。

楓太 六〇メートルはあり得るんか。

敦志 確かじゃ。

楓太 ボケが始まっとんとちがうか。

敦志 こっちの台詞じゃ。

水の音。
敦志、カウンターの中に入り、棚の整理など。

敦志 近々壊されるらしい。あのプール。

楓太 え。何で。

敦志 老朽化。

楓太 知らんかった。

敦志 また新しいのができるゆう話じゃけど。

楓太 できて何年じゃ。

敦志 え。

楓太 あのプール。

敦志 半世紀。あと四年で。

楓太 ほうか。

水の音。

楓太 奈津は時々来るんか、ここ。

敦志 開店してすぐの頃に、一ぺんだけ。

楓太 男とか。

敦志 いや。

楓太 同じ高校の先生と。

敦志 一人じゃった。

楓太 色気ないヤツじゃ。あ。

敦志 え。

楓太 お前、どうじゃ。

敦志 何が。

楓太 奈津。

敦志 どうて。

楓太 ま、二人とも一人じゃし。

敦志 どうかしたか、それが。

楓太 ええじゃないか、ちょうど。

敦志 お前、な。

と、カウンターを出て楓太に近づく。

楓太 何じゃ。

敦志 気いつかんのか。

楓太 何じゃ。

敦志 奈津は。奈津はの。たぶん今も。

楓太 そういや遅いな、あいつ。

敦志 ええワ、もう。

と、カウンターの内側に戻る。

敦志 楓太。

楓太 ああ。

敦志 お前、な。

楓太 何ぞ。

敦志 鈍いところあるぞ、昔から。

楓太 は。

敦志 鈍感なんじゃ。

楓太 誰が。

敦志 お前じゃ。

楓太 え。

敦志 気いつかんのじゃ、何もかも。

楓太 何に。

敦志 昔からじゃの。村一番の大きな寺で何
や。不自由のう育って、のほほんとしとるんじ

楓太 好きで寺に生まれたんじゃないぞ。お前じゃて。

敦志 (さえぎって) 奈津はの。
楓太 奈津がどうかしたか。
敦志 いや。ほじゃけど沙希江は。
楓太 今度は沙希江か。
敦志 ええワ、もう。
楓太 何じゃ。わかるように言え。

水の音。
カウンターを出て、楓太のいるテーブル席の椅子を引き寄せ座る敦志。

敦志 楓太。
楓太 ほじゃけん、何ぞ。
敦志 お前。
楓太 さっさと言え。
敦志 何で。
楓太 え。
敦志 何で結婚せんかったんじや。
楓太 は。
敦志 何で。
楓太 結婚、したけん今子どもが四人じや。
敦志 いや。

水の音。

敦志 あいつと。
楓太 あいつ。

水の音。

敦志 沙希江と。
楓太 何ぞ、急に。
敦志 同棲しとったんじやろ。
楓太 まあ、の。
敦志 あいつが東京の短大を出るまで、二年も。
楓太 そがな古いこと。

敦志 お前と。お前と結婚しとったら。

水の音。

敦志 変わっていったかも知れん。

楓太 何が。

敦志 沙希江の。

楓太 沙希江。

敦志 あいつの、未来。

楓太 ワシのせいかな。ワシが悪い言うんか。

と、立ち上がる。

楓太 言えるんか、お前に。

敦志 は。

楓太 お前にそれが言えるんか。

楓太、椅子を蹴る。

楓太 お前、何で行かんかったんじゃ、今日。
ワシらと一緒に。

水の音

楓太 言うてみい。お前、お前こそ何で。

奈津 楓太。

奈津がいる。通路上手側、階段の近くに。黒のスーツ姿。
音楽。溶暗。

第二場

同じくカフェ濡の店内。
中央のテーブル席に楓太と奈津。テーブルの上には二人分のコーヒークップと水の入ったグラス。カウンターの中に敦志。

奈津がふいにグラスをつかんで立ち上がり、楓太に水を浴びせかける。

奈津 ケダモノ。
楓太 何ぞう。

と立ち上がる。

奈津 女の子を納屋に連れ込むような奴じやったとは。

楓太 連れ込んだんじゃないわい。

奈津 中学生のぶんざいで。

楓太 雨宿りじゃ。ワシの足がつってしもたんじゃない。

奈津 嘘。口実じゃ。そう言うてマネーじゃー連れ込んだんじゃない。

楓太 あいつが。沙希江が付き添うてくれたんじゃない。

奈津 同じこと二回も言うな。聞きとない。

楓太 お前が信じようとせんけんじゃ。

奈津 きっかけはどうでも。したんじやる。

楓太 何を。

奈津 何をて。要するに。最後まで、というか。

楓太 それはまあ。成り行きというか。

奈津 うわ。陸トレの最中に。しかも納屋で。

楓太 ほっとけ。お前も一緒に走りよったはずじゃ、あの時。

奈津 走りたない。そんなヤツと一緒に。心配ご無用。高校からお前とは別々です。

奈津 知らんわ、こんなヤツ。何でよりによつて陸トレの最中に。何であんただけ納

屋の中に。

楓太 (ふてくされて) 悪かったの。

と、階段に座る。奈津は息荒く、

奈津 知ったった、敦志。
敦志 いや、まあ。

と、カウンターを出て、奈津に水の
入った新しいグラスを渡す。奈津、
立ったままごくごく飲んで、椅子に
どすんと座る。敦志、楓太におしぼ
りを渡す。楓太、頭や肩などをぱた
ぱたと拭く。

楓太 いっつも自転車で伴走しよったじゃ
ろ、沙希江が。陸トレのとき。

奈津 まあ、それはそうじゃったけど。

楓太 ほれみい。

奈津 何が。だいたい、あんた、二年のとき
はカスミ先輩と付きおうとつたんじゃ
ないん。

楓太 う。

奈津 いっつも一緒に帰りよつたら、部活終
わってから。手えなんかつないで。

楓太 あれは。たまたま方向が一緒で。

奈津 ともかく。カスミ先輩から沙希江ちゃ
んに乗り換えたんじゃ。その雨宿りがきつ
かけで。

楓太 乗り換えた、て。人聞きの悪い。

奈津 ほんなら何。

楓太 相変わらずじゃの、奈津は。

奈津 何（なん）よ。

楓太 もうちよつと落ち着いてしゃべれ。

奈津 いらん世話じゃ。話変えるな。

楓太 お前、ほんとにそれで勤まりよるんか。
何が。

楓太 こんなんが高校のセンセイしよるて。
信じられんわ。

奈津 学年副主任です、これでもいちおう。

敦志、奈津のグラスに水を注ぎなが
ら、

敦志 楓太はな。

奈津 （かみつくように）何。

敦志 流されたんじゃ。そのときにわか雨

に。

奈津 は。

敦志 大川の、橋渡ったところ、田んぼのはたにあった納屋じゃろ。

楓太 う。

敦志、楓太が座っていた椅子に腰かける。

奈津、無意識に、テーブルの上にあった株式会社「椰子の実パン」のビスケットを取り出し、がりと齧る。次いでそれをコーヒーに浸したりしている。

楓太 ちようど秋から冬に変わる頃じゃ。み

ぞれみたいな雨が降ってきた。体冷えてきて。そんなときはワシ、ガキのころからよう足が攣（つ）るんじゃ。しようがないけん、みなを先に行かして。納屋で雨宿りしようと思たら、沙希江が自転車停めて。何となく一緒に納屋の中に入って。ワシ、シャツが濡れて冷たかったけん、脱いだら、沙希江が。こう、寄り添ってきて。温かこうて、柔らかこうて、あいつ。

奈津 ばかばかばか。楓太の大ばか。聞きたない。

楓太 お前、な。どーでもええけど。何とかならんか。

奈津 何が。

楓太 その、菓子をコーヒーに浸けて食べる癖。

奈津 固いんじゃもん、これ。

楓太 固さが値打ちなんじゃ、ウチの焼き菓子。

奈津 あんたとこの会社の。このクッキー。

楓太 ビスコット。

奈津 ビスコット。

楓太 ビスコット。

奈津 どーでもええけど。何かイマイチじゃね、これ。

楓太 うるさい。そんな食べ方するけんじゃ。

奈津 どう食べようと、消費者の勝手。

楓太 ふん、末端消費者が。

奈津 は。

楓太 せっかく持って来てやったのに。うちの会社の話題の新商品。発売目前のヤツ。

奈津 毒見したげたんデス。テレビで宣伝するわけじゃなし、何が「話題の」じゃ。

楓太 うちの三番目がようしよるわ。それ。

奈津 何。

楓太 息子。四つの。温めた牛乳に浸けて食べよる、嫁さんが焼いたクッキーなんか。

奈津 あ、そう。私、もの心ついてからずーっとこの食べ方。

楓太 くそ。なんか腹立つ。

敦志 ほじゃけどそれじゃうちのコーヒーの味がわからんようになる。ココナツで味付けすな。

奈津 わかるて。はじめのひと口で。

敦志 ほうか。どんな味じゃ。

奈津 うん。いかにも敦志、いう味。

楓太 何じゃそれ。

奈津 深うて静かで、ゆっくり語りかけてくる。

楓太 はあ、さすが国語のセンセー。

奈津 (軽く)うるさい。

楓太、テーブル席へ。

楓太 そのうちワシの淹れたコーヒーも飲みましちやる。

奈津 飲みたないわ。あんたの淹れたんなんか。

楓太 ワシじゃて割とうまいぞ。嫁さんもうまいゆうてくれる。

奈津 あ、そ。奥さんお上手じゃね。

楓太 ほじゃけん、うまいんはワシ。ワシのコーヒー。

奈津 いや。おだてて旦那を使うんが。

楓太 ほんとにうまいんじゃない。パンや菓子作
つとると、飲み物にもうるさなるんじゃない。

奈津 営業じゃろ、あんたは。
楓太 おんなじことじゃ。

奈津、わざとらしくゆっくりとビス
コッティをコーヒーにつけてから
食べる。

楓太、それを見ながら、

楓太 全く。ガキじゃあるまいし。

奈津 ほっといて。

楓太 ワシらもう半世紀も生きとんぞ。

奈津 はあ。おばあさんじゃね。

楓太 わ。急にえらい素直じゃの。

奈津 そう思うもん、実際。マキちゃんてお
ったろ。

楓太 マキちゃん。

敦志 村でうちの近所におったマキコか。

奈津 そう。

楓太 アイツ走るん速かったの。運動会、い
つつも一等賞じゃった。

奈津 お盆にお墓参りに行ったら偶然会
うて。小さい女の子の手え引きよった。四つ
じゃて。

楓太 うちの三番目と同じか。

奈津 それが。孫じゃて。

楓太・敦志 え。

奈津 それも二番目の。

楓太 ショックじゃ。

と、がっくりと落ち込む。

奈津 何もそこまで。

楓太 ワシ、昔ちよつと好きじゃったんじゃ、
マキコのこと。

敦志 であー。

奈津 ほんつと、誰でもええんじゃないね。

楓太 大昔。小学校の頃じゃ。

奈津 ふふふふふ。

敦志 うわっ。びっくりした。

楓太 何ぞ、気色悪い。

奈津 思い出した。生徒がね。

敦志 お前とこの高校の。

奈津 うん、私が教えよるクラスの、一年の男の子。

敦志 お前、ほんとに勤まりよるんか。セン

セイなんか。

奈津 なんよ。

楓太 お前、いつも言いよつたろ。数学わからん、て。

奈津 国語教えよるのに、数学は関係ないじやろ。

楓太 ほじゃけどお前、大丈夫か。

奈津 何が。

楓太 馬鹿にされてないか。生徒に。

奈津 はあ。

楓太 授業中、騒がれたり、生徒に殴られたりしてないか。

奈津 あんた、そがなとしよつたん、高校のとき。

楓太 まさか。ワシはものすごう真面目な優等生じゃった。

奈津・敦志 はーん。

楓太 何ぞう。

奈津、無視して敦志に、

奈津 ほいでね。その一年の男の子がね。私のこと、おばあちゃん、て。

楓太・敦志 え。

奈津 なんかね、おばあちゃんに似とるんじやて、私が。

敦志 高校生の孫。

楓太 はあ。中学生くらいで結婚したらありうるか。

敦志 お前が言うな、て。

奈津 おとし亡くなったそうやけど、その

おばあちゃん。でもちよつとね。

と、くすりと笑う。

敦志 何ぞ。

奈津 嬉しかったな、何か。

敦志 おばあちゃん、て呼ばれてか。

奈津 その子がおばあちゃんのこと、すごく好きじゃった、て気持ち伝わってきたんだよ。

楓太 さすがに早すぎるじゃろ。高校生の孫、

は。

奈津 まあね。

敦志 うん。

奈津 雑誌にね。占い、て載つとろ。

楓太 えらい話が飛ぶな、お前も。

奈津 学生の頃、美容院かどつかで何かの雑誌ぱらばら見よつたら、「四十歳で大恋愛します」て書いてあつて。

敦志 当たったか。

奈津 忘れた。

楓太 はずれたに決まつとる。

奈津 人間て四十歳にもなつて、まだ恋愛なんかするんか、と思た、そのとき。

敦志 するじゃろ、そりゃ。

奈津 ほうじゃね。

敦志 そいからさらに十年、か。

奈津 信じられんワ。あんたらの顔見よつたら、明日もまたプールで会いそいな気がするワ。

楓太 そんなわけあるかい。ワシらもうシモの毛にも白髪混じる年頃じゃ。

奈津 ばかばかばか、楓太の大ばか。変なこと言うな。

水の音。

敦志 奈津だけじゃな。大学まで水泳続けたんは。

奈津 下手なんよ。

楓太 知つとるわ。助けに飛び込もかと思したことあったで。溺れよるんか思て。お前のフリー。

奈津 楓太のブレストこそ。思い出したら笑えてくるワ。全然進まなかったな、なんぼ水かいても。

敦志 ほいでもこいつ、いちおうタイトルホルダーじゃ。

楓太 三〇年ほど前の、な。

奈津 ああ。

敦志 高三の県大会。二〇〇フリーじゃったか。大会新。

楓太 二年ほどは破られんかったらしい。ワシの記録。

敦志 こいつも高校までは続けたけん。

奈津 沢高のキャプテンじゃろ、いちおう。楓太 いちおう、で。

楓太、ちよつと憤慨。奈津、そしらぬ顔。

敦志 あ、奈津。お前覚えとるか。どっちが勝ったか。

奈津 え。

敦志 ワシらがやった潜水の競争。

奈津 いつ。

楓太 中三の、最後のシーズン。引退の直前。

奈津 ああ、あれ。私が勝った。

敦志・楓太 は。

奈津 三人でやったじゃろ、競争。沙希江ちゃんが審判で。五〇折り返したとこで、二人とも上がったけん、私がもうひとかき稼いで、私の勝ち。

楓太 嘘じゃ。のう敦志。

敦志 ああ。ありえん。

奈津 ボケてきたん違う、二人とも。

楓太 それはお前の方じゃ。

奈津 (口調を変えて) 何でやめたん、楓太。楓太 え。

奈津 やめることなかったのに。

楓太 何を。

奈津 水泳。そがに自信あったんなら続けたらよかったんじゃ、東京の大学でも。

楓太 それは、まあ。忙しかったし。バイト。

敦志 同棲しとったけん、こいつ。沙希江と。

楓太 二年も一緒に暮らしたんじゃ、ワシ。あいつが東京の短大卒業するまで。

奈津 知っとったけど。よう親にばれんかったね。

楓太 ま、行ったり来たり。半分同棲。

楓太、グラスの水を飲む。奈津、ビスコッティをコーヒーに浸して食べ、そのコーヒーをひと口飲んだりする。

敦志、カウンターの椅子に座る。
水の音。

奈津 ふっくらして見えたね、沙希江ちゃん。ほっぺたのあたり。

楓太 昔と変わらんかったの、写真も。

奈津 かなり痩せとったんじゃけど。最後の方にお見舞いに行ったときは。

楓太 がいようしたんじやろ。

奈津 誰が。

楓太 専門の人が。顔きれえにしたり、服を着せたり。

奈津 よう知つとるね。

楓太 寺の長男じゃけん。いちおう。

奈津 そういや、えらい立派なお数珠持つとったね、あんた。

楓太 まあ寺の長男じゃけん。いちおう。

水の音。

奈津 少なかったね。お参りの人。

楓太 また、それか。

敦志 奈津は何べんも行ったんじやろ。見舞

奈津 いや。あんまり行けんもんじゃね、気になつても。

楓太 月に一、二回、いうたか。

奈津 半年もあつたのにね、最後に入院してから。

楓太 喜んでつたよ、きっと。沙希江。

奈津 嫌がつてはなかつた思うけど。

敦志 喜んでなかつたんか。

奈津 よう言われた。何か用事のついでに来たん、とか何とか。

敦志 ほうか。

奈津 帰るときも、お見舞いありがとう、でもないし。

楓太 あいつらしいの。

奈津 何が。

楓太 強がつとつたんちがうか。同情されたくない、ゆうか。

奈津 何で。

楓太 何で。

奈津 何で。

奈津 何でそう思うん。

楓太 何となく。

奈津 何となく、か。

楓太 ともかく奈津に知らせてもろてよかった。

奈津 ほうで。

楓太 後で知つたらもっと辛かつたじゃろな。

奈津 ああ。

楓太 やつぱり最後送つてやりたいし。

奈津 行つてあげりやよかつたのに。お見舞いも。

楓太 無理じゃて、それは。

奈津 何で。

楓太 もうとつくに終わつたんじゃ、四半世紀も前に。

奈津 ほじゃけん。

楓太 旦那に会う勇氣なかつたし。

奈津 会うたじゃろ、今日。

楓太 最後くらいは、の。

敦志 挨拶したんか。

楓太 焼香だけ済ませたら帰るつもりじゃったのに。こいつに引つ張られて、ひとこだけ。

敦志 せずに帰るわけにはいかんじやろ。

楓太 まあ、の。実際、人、少なかったし。

敦志 うん。

楓太 寂しい感じじやった。全体に。

敦志 そら、通夜じやし。近所や親戚中が集まって酒呑むわけでもないじやろ。

奈津 村じやあるまいし、ね。

敦志 沙希江は兄弟もおらんし。親戚もおらんのと違うか。

楓太 あいつの親はどっか遠くの人じやったの。

敦志 駆け落ちして村に來たて聞いた。

楓太 よう知つとるの、お前。

敦志 あ、いや。昔、お袋がちらつと。

奈津 産婆さんは村中の家のこと知つとるけんね。

敦志 聞いたことあるじやろ。お前も。

楓太 ワシは、本人、沙希江から。

敦志 そいで、あいつの親は、今は。

奈津 さあ。もう村にはおらん、て聞いたけど。

水の音。

楓太 あなに子だくさんじやったんか、沙希江は。

奈津 うん、七人。

楓太 もう大きかったけどな。うちよりだいぶ。

奈津 下の二人はまだ中学生じやて。

楓太 あの子おは。

奈津 え。

楓太 あの一番上の女の子は。

奈津 あ、ああ。

楓太 ミオちゃん、て呼ばれよったか、旦那

奈津に。
あ、うん。
楓太 村の名あ付けたんじやの。
奈津 ほうじやね。
楓太 大学生か。
奈津 え。
楓太 あの長女。沙希江の。
奈津 あ、ああ。うん。この春に卒業して就職したて聞いたけど。

と、グラスの水を飲む。水の音。

楓太 短大出て、ワシと別れて。東京でOL
したんじやろ、あいつ。
奈津 うん、一年ちよつとかな。
楓太 ずっと連絡あったんか、奈津は。沙希江と。
奈津 あったり、途切れたり。

水の音。

奈津 電話かかってきて。半年前に。
敦志 沙希江からか。
奈津 ご主人から。最後の入院になると思います、いうて。
敦志 ああ。
奈津 敦志、あの。
敦志 え。
奈津 ううん。
楓太 奈津。
敦志 何ぞ。
奈津 うん。

水の音

奈津 初めはね。
敦志 え。
奈津 あ、いや。入院した初めの頃は、むくんでぼっちゃりしとったんよ。沙希江ちゃん。

敦志 うん。

奈津 ほじゃけどだんだん痩せてきて。最後の三か月はホスピスで。ご主人は毎日毎日お見舞いに来て。ときには一日に二回も三回も。

楓太 うん。

奈津 沙希江ちゃんも甘え放題ご主人に甘えて。あれ食べたい、これ持ってきて、いうて。

楓太 ほうか。

敦志 知り合いか、前から。

奈津 え。

敦志 その。沙希江の旦那と。

奈津 五年ほど前かな、一回家に遊びに行つて、その時に。

敦志 ああ。

奈津 年賀状出したら夫婦連名で返事がくるようになった。

楓太 さすがに筆まめじゃの、国語のセンスは。

奈津 あんただけじゃ、年賀状もよこさんの

楓太 そういや毎年きとるの、奈津からは。返事くらい書け。

水の音。

奈津 ふた月くらい前にね。

敦志 うん

奈津 たまたまご主人と行きおうて。

敦志 え。

奈津 立ち話。病院の廊下で。

敦志 ああ。

奈津 ずっと。三十分くらい。

敦志 何を。

奈津 え。

敦志 何か言われたんか。

奈津 あ。ううん。

楓太 何ぞ。

奈津 いや。うん。

水の音。

奈津 楓太。

楓太 何ぞ。

奈津 あの、娘さんね。

楓太 え。

奈津 あの一番上の娘さんが。

楓太 ああ。

奈津 聞いたんじやて。ご主人に。中学生の

とき。

楓太 何を。

奈津 うん。

水の音

奈津 お父さんの子じゃないの、私、て。

楓太・敦志 え。

奈津 あの、ミオちゃんて子が。

敦志 それで。

奈津 お父さんの子だよ、て。ご主人は。

楓太・敦志 ああ。

奈津 ほじゃけど。あの娘さんがご主人に言

うには。

楓太 え。

奈津 黙ってたて。お母さん、沙希江ちゃん

は。

敦志 え。

奈津 お父さんの子じゃないの、て、娘さん

に聞かれて。

敦志 それで。

奈津 ご主人は怒ったて、沙希江ちゃんに。

敦志 怒った。

奈津 何で「お父さんの子だ」って言ってや

らないんだ、て。

水の音。

敦志 何で病院の廊下で、そんな。

楓太 そりゃ。

敦志 え。

楓太 沙希江の病室でするわけにもいかんじゃろ。

敦志 いや、そういうことじゃのうて。

奈津 溜まっとったみたい、ご主人、いろいろ。廊下で会って、ぶわーって、すごい早口でいろんなこと。

敦志 いろんなこと。

奈津 ああ。まあ。

敦志 ほかにもあるんか。

奈津 あ。うん。ううん。

楓太 例の。宗教か。

奈津 それもある。

楓太 お前ところにも来たか、勧誘ちゅうかオ
ルグちゅうか、手紙。

奈津 楓太とも。

楓太 いや。

奈津 ほんなら何で。

楓太 風の噂、じゃ。六、七年前か。村の同
級生は大勢誘われたらしい。

奈津 教祖様と旅に出て一緒に幸せを見つ
けましょう、いうやつね。

敦志 そいで。

奈津 断ったよ、もちろん。

楓太 あの旦那も宗教の人か。

奈津 ううん。それは反対しとったみたい。
ずっと。

敦志 ほうか。

奈津 宗教の人には知らせてないと思う。
お通夜もお葬式も。

敦志 何で。

奈津 ほじゃけん、ご主人、えらい嫌うとつ
たけん、あの宗教。

敦志 いや、何で宗教関係の人には知らせて
ないとわかるんじゃ。

奈津 お参りの人、少なかったけん。

敦志 ああ。

奈津 沙希江ちゃん、近所の人にも勧誘して回ったみたいで。

敦志 旦那がそう言うたんか。

奈津 家に行ったときね、五年前、沙希江ちゃん。

敦志 うん。

奈津 近所で道聞いたら、ちよつと反応が変で。

敦志 え。

奈津 孤立しとる感じじゃった。ようはわからんけど。友だちいうたら宗教関係の人しかおらんかったと思う、沙希江ちゃん。

敦志 ああ。

奈津 うん。

敦志 ほじゃけど。子どもは。

奈津 子ども。

敦志 いや。賑やかじゃろ、七人もおったら。

奈津 宗教のことや、いろんなことで留守がちじゃったみたいじゃし。ちよつと複雑じやと思う、気持ち。

楓太 あの子らには今日初めて会うたんか、奈津も。

奈津 うん。病院でも会ったことはなかった。

敦志 旦那は。

奈津 最後はね。ほんと、優しかったんじゃけど。

敦志 何年じゃった、結婚して。

奈津 さあ。いつ入れたんじゃろ、籍。

水の音。

奈津 楓太は。いつじゃったつけ。

楓太 え。

奈津 結婚。

楓太 ああ。

奈津 沙希江ちゃんと別れて。そいから。楓太 まる六年か。就職して四年たってから。

奈津 なかなか出来いで、子どもが。楓太 (さえぎって)

楓太 何ぞ。

奈津 何で。

楓太 え。

奈津 せんかったん。

楓太 は。

奈津 結婚。

楓太 え。

奈津 結婚。

楓太 した、て。嫁さんは短大出たてのOL
で。

奈津 (さえぎって) ほうじやのうて。

楓太 は。

奈津 沙希江ちゃん。

楓太 お前も言うんか、そがなこと。

奈津 え。

楓太 合わんかったんじゃ、沙希江とは。

奈津 は。何が。

楓太 決まっとるじゃろ。セックスじゃ。

奈津 ばっ。ばか。ばか。ばか。楓太の大
ばか。

楓太 フラレたんじゃ、ホンマは。ワシが沙
希江に。

奈津 流されたんじゃろ、ほかの女に。

楓太 う。

奈津 え。ほんと。

楓太 許してもらえんかった。必死であやま
ったけど。

奈津 そら当たり前じゃ。

楓太 ショックで結構ひきずったんぞ。何年
も。

奈津 自業自得。

楓太 うるさい。

楓太のため息。

楓太 ほんとは、の。ワシもバイトきつうて。
なんか、いろんなことで喧嘩ばかりにな
って。あれ以上いっしょにおることはでき
んかった、と思う。たぶん。

奈津 ああ。

楓太 ほじゃけど今思たら楽しかった。あいつの声、今も思い出して、の。ホンマ夢のようじゃ。

奈津 もし。

楓太 え。

奈津 もしも。

楓太 何ぞ。

奈津 結婚。

楓太 は。

奈津 変わっとったかも知れん。

楓太 何が。

奈津 結婚しとったら。楓太と。

楓太 え。

奈津 うん。

楓太 何のことじゃ。

奈津 運命、というか。沙希江ちゃんのお

楓太 ワシか。ワシのせいじゃ言うんか。お

前も。お前まで。

奈津 せい、とかじゃのうて。

楓太 何ぞ。

奈津 楓太。

楓太 ほじゃけん、何ぞ。

奈津 沙希江ちゃんは。沙希江ちゃんはね。

楓太 (いらだつて) 奈津。

奈津 (さえぎって) 沙希江ちゃんはね。お見舞いに行くたんびに楓太のことばっかり言いよつた。

水の音。

奈津 あんな温かい人はおらん、て。この世で一番気持ちが合う人じゃったのに、て。何か違うこと言いよつても、結局話はそこ

楓太 (さえぎって) やめい。

奈津 楓太。

楓太 やめてくれ。

水の音。

楓太 敦志。お前。

敦志 。

楓太 お前、お前こそ。沙希江と。

奈津 (さえぎって) 楓太。

楓太 何ぞ。

奈津 やめとき。

楓太 何で。

奈津 さっき、そう言うたろ、あんたが。

楓太 ほじゃけど。

奈津 よかる、もう。今さら。

敦志 何。

楓太 いや。

敦志 何ぞ。

水の音。

奈津 敦志。

敦志 何。

奈津 何で来んかったん。今日。

敦志 え。

奈津 お通夜。沙希江ちゃんの。私らと一緒に。

楓太 奈津。

奈津 何。

楓太 やめとけ。

奈津 近くじゃのに、ここ。

敦志 え。

奈津 あの何とかメモリアルホールから。

敦志 ああ。

奈津 お葬式には行くんじやろ、明日。

敦志 いや。

奈津 何で。

敦志 何でて。ずっと連絡とってなかったし、

沙希江とは。

奈津 (さえぎって) そんなん。同じじやろ、

楓太 じゃて。

水の音

奈津 敦志。

敦志 え。

奈津 何でこの町にしたん。

敦志 何。

奈津 カフェ開くの。

敦志 ああ。

楓太 奈津。

奈津 こんな駅の裏側に。

敦志 それは。たまたま。

奈津 ここからバスで三〇分くらいじゃろ。

敦志 何が。

奈津 沙希江ちゃんの家。

水の音。

楓太 敦志。見たんじゃ。ワシら、今日。

水の音。

奈津 沙希江ちゃんの、一番上の娘さんの、顔。

水の音。

奈津 敦志は沙希江ちゃんと。

楓太 (同時に)お前がここに店出したんは、言うな。

目をそらす敦志。

水の音、長く。

奈津 いつ、から。

敦志 え。

奈津 沙希江ちゃんと。

水の音。

敦志 放っとけんかったじゃ。
奈津 え。

敦志 ものすごう荒れとつて。

奈津 何。

敦志 あいつ。

奈津 沙希江ちゃん。

敦志 呑めんのに。酒。

奈津 いつのこと。

敦志 楓太が結婚したすぐ後じゃ。

水の音、長く。

楓太 いつつもじゃ。

奈津 え。

楓太 あいつはいつつも。

水の音。

楓太 あいつは。

水の音。

楓太 いつつも、そこにはないもんを、どつか遠くの、あるんかないんかわからんもんを捜さずにおれんじゃ、あいつは。(涙声)

水の音。

奈津 ほじゃけど、あの、ミオいう子おは。

敦志 ワシがそれを知ったんはだいぶ後じ

や。

奈津 ご主人とは。

敦志 知らん。

水の音、長く長く。

踏切の遮断機が下りる音が、かすかに伝わってくる。

楓太、腕時計を見て、

楓太 いかん。

立ち上がり、鞆を引き寄せる

敦志 帰るんか。

楓太 ああ。

敦志 だいぶ遅いぞ、もう。

楓太 うん。

敦志 泊れるぞ、上。一人くらい。

楓太 明日朝イチで得意先と打ち合わせじや。嫁さん待ちよるし。

と言いながら鞆を開けて、その場で着かえ始める。

楓太 窮屈でいかんワ、式服は。こがに腹出てきたら。

と、ズボンを脱ぐ。

目のやり場に困り、慌てる奈津。

奈津 わっ、ばか。ばかばか。楓太の大ばか。

と、楓太の背中あたりに乱暴に叩く。

楓太 いててて。お前なあ。

と、向き直る楓太。上は喪服で下はトランクス。

奈津 何よ。

楓太 そがなけんいまだに貰い手がないんじゃ。沙希江はそがなことせんかったぞ。かわいいて、世話好きで、いっつも優しいて、うまい飯喰わせてくれて。あのふわっとしたオムレッツ、もう喰えんのか思たら泣けてくるわ。奈津もちよっとは沙希江を見習え。ばか。

水の音。

奈津 (おさえた声で) 何でそなに沙希江ちゃん
がええん。

水の音。

奈津 わけわからん。そなに美人ゆうわけでもないし、結局裏切られたんじやろ、楓太も敦志も沙希江ちゃんの旦那さんも。ほじやのにどしてそがに沙希江ちゃんがええんよ。男の人に色目使うて。みいな、それでころつと騙されて。短大の頃じやて、楓太に内緒で何べんも合コンに行った、て言うてた。楓太、知らんだけじや。二股も三股もかけられて。結婚してからも、その頃の男と続いとつたらしい、てご主人が。中身なんかないじやろ、沙希江ちゃんに。宗教にはまったんじやて、よっぽど自分に自信がなかったけんじや。そこでもやつぱり男ができて。ほいでますますのめりこんで。いつつもかわいこぶって、沙希江ちゃん。タイム取るだけじやったら、気楽なもんじや。ほじやのにみんな沙希江ちゃんばっかりちやほやして。私なんかいつつ男子部員と同じだけ泳がされて。誰も気いなんか遣うてくれんかった。私じやて沙希江ちゃんみたいに大事にされたかった。ばかばか、楓太の大ばか。

だんだんと叫び声になってゆく奈津。

楓太 奈津、やめい。
敦志 奈津。

水の音。

楓太 氣い遣うて欲しかったんか、お前。
奈津 あ。
楓太 遣うとつたよ。

奈津 え。

敦志 氣い遣うとったよ。

水の音。

敦志 なるべく女じやて意識せんように。

水の音

楓太 なるべく仲間でいられるように。

溶暗。音楽。

第三場

水の音。カフェ「滯」の店内。薄暗い。

カウンター席に突っ伏してうとうととしている様子の敦志。

水の音、ぽたぽたぽた、と。そして川の流れる音。

幼児のように目をこする敦志。

女性の声 あつし。

敦志 え。

女性の声 あつし。

敦志 あ。

女性の声 あつし。

敦志 姉ちゃん。

女性の声 あつし、泣かれんよ。

敦志 母ちゃんは。

女性の声 さつき、大川の橋んとこの家のお

いさんが呼びに来た。

敦志 赤ちゃん。

女性の声 うん。「産婆さん、もうすぐ生ま

れるけん、来てつかあさい」、いうて。

敦志 ああ。

女性の声 あつし、泣かれんよ。ね。姉ちゃ

んと遊ぼ。

敦志 うん。

女性の声 一緒に留守番しよう。

水滴が水道の蛇口からたらいに落ちる音。
ぽったり、ぽったり。

女性の声 ええ音じゃろ。

ぽたり、ぽたり。ぽたり、ぽたり。

女性の声 あつしはこっちの方が好きなん。

ぽたぽたぽた、ぽたぽたぽた。
そして川の流れる音。

女性の声 姉ちゃんはこれがいちばん好きじゃ。

敦志 姉ちゃん。どこにおるん。

女性の声 ここにおるよ。

敦志 嘘じゃ。おらん。

女性の声 おるよ。

敦志 姉ちゃん。

女性の声 え。

敦志 今も、水の中におるん。

川の流れる音。

女性の声 もう生まれたよ。母ちゃん、もうつけ帰ってくるよ。

敦志 姉ちゃん。どこにおるん。姉ちゃん。

女性の声 あつし、姉ちゃんはね。いつでもおるよ。待ちよるよ。あつしのこと。

敦志 姉ちゃん。

階段の上に女性の影。

敦志 姉ちゃん。

溶明。
階段の上に奈津がいる。

奈津 敦志。
敦志 え。あ。
奈津 どうかした。
敦志 え。あ。いや。

奈津、階段を下りてくる。

奈津 何。
敦志 いや。間に合うたか。
奈津 何とか。
敦志 怒ったじゃろ、楓太。送らいでええ、
奈津 言うたのに、とか何とか。
奈津 まあね。ほじゃけど。

と、手近の椅子を引き寄せて座る。

奈津 寂しかったんかも知れん。ほんとは。
敦志 何で。
奈津 おっ、って顔したけん。私の顔みたと
き。
敦志 何じゃ、おっ、て。
奈津 顕微鏡で見たらわかる程度の嬉しさ、
というか。
敦志 希望的観測っちゅうヤツじゃな。
奈津 は。

水の音。

奈津 誰でも寂しいよ、夜の高速バスは。
敦志 いっしょに乗ってしもたらよかった
のに。

奈津 え。方向違うし。タクシーで帰るワ、
私は。
敦志 ほうか。
奈津 隣町じゃし。

奈津、ちよつと笑う。

敦志 何ぞ。
奈津 バスが来るまでちょっと時間あって。
敦志 楓太に聞いたらね。
敦志 何を。
奈津 何でパン屋に就職したん、いうて。
敦志 ああ。
奈津 覚えとる。
敦志 何。
奈津 中学の頃、よう練習見に来てくれた先輩おつたろ。
敦志 先輩。男。
奈津 うん、卒業生。あの、学校の前のお店の。
敦志 ああ。ワシ、ちょっと苦手じゃった。
奈津 何で。
敦志 若いのにぶ厚い眼鏡かけて。何か偉そうにして。顧問でもないのに。
奈津 優しいところもあったよ。私らにパンくれたろ、プールから上がったら。
敦志 ほうじゃったか。
奈津 たまに、じゃけど。
敦志 残りもんじゃないんか、店の。
奈津 ほじゃけどすごい楽しみじゃった。ア
ンパンとかジャムパンとか。
敦志 どこにでも売りよるヤツじゃろ。
奈津 今は、欲しかったら何ぼでも自分で買えるけど。
敦志 ほいで楓太はパン屋を目指したんか。
奈津 決め手はそれじゃった、て。なんぼか
内定とつたあとで。
敦志 (さえぎって) ええんか。
奈津 何が。
敦志 ほかに言うことがあったんと違うんか。
奈津 え。
敦志 パンがどうこうじゃのうて。
奈津 何のこと。
敦志 下手なんじゃろ、途中でやめるんが。
奈津 あ。

敦志 好きなんじやろ、楓太のこと。ガキの頃からずうっと。

奈津 何で。

敦志 わかるて。

奈津 ほじゃけん、何で。

敦志 わかるよ。長い付き合いじゃ。

奈津 そがな話したことないじゃろ。

敦志 いろんな人が来るんじゃ、ここには。

奈津、うつむく。テーブルの上のビスコッティを一つつまみ、がりりとかじる。

水の音。

遮断機が下り、電車の通りすぎる音。

奈津 ここ、時間、もうちよつとええ。

敦志 ああ。コーヒー、もう一杯飲むか。

奈津 うん。ありがとう。

と、くすりと笑う。

敦志 何ぞ。

奈津 敦志、子どもの頃、コーヒーなんか飲

んだことあった。

敦志 ない。

奈津 私も。インスタントはあったけど、お

客さん用で。

敦志 家で飲むんは番茶だけ。それも出がら

しの。

奈津 どの家もほうじゃったね、澤村は。

と、またくすくす。

奈津 ほじゃけど今は、楓太はコーヒー淹れるんがうまいて自慢するし、ビスコッティ、とか何とか。可笑しいて。

と、ビスコッティの袋を光に透かしてみたりする。

奈津 敦志は何とカフェのオーナーで。
敦志 うん、そーいや可笑しいの。

敦志はカウンターの中へ。コーヒ
を淹れ始める。
奈津、カウンターの椅子に座る。
水の音。

奈津 この音は。

敦志 え。

奈津 この、水の音。

敦志 ああ。コーヒーとおんなじ。たぶん。

奈津 え。

敦志 好きなんよ。一滴ずつ、落ちていく感
じが。

水の音。聞き入る奈津。

見回して、

奈津 何かプールの底みたいじゃね。ここ。

敦志、カウンター越しに新しいコー
ヒーを奈津の前に置く。

奈津 あのプール、ね。

敦志 うん。

奈津 珍しいと思わん。

敦志 え。何が。

奈津 私らの年代で、あんな片田舎の学校に
立派なプールがあったんは。

敦志 ああ。

奈津 ちゃんと二十五メートルで六コース。
スタート台付き。

敦志 小中学校共同で使いよったけどな。

奈津 大学の友だちに聞いたら、プールがな
かった学校も結構あるみたいじゃ。

敦志 脇に子供用プールもあったの。ワシら
とこのは。

奈津 夏休みなんか、毎日泳ぎに行ったね。

敦志 お前は楓太について行ったんじやろ。

奈津 小さい頃はね。家近かったし。

敦志 水泳部も、楓太が入ったけん、か。

奈津 好きじゃったし。

敦志 うん。

奈津 いや、泳ぐんが。

敦志 ああ。

奈津 何となく水泳部、かな。

敦志 ワシは中学まで、楓太も高校まででやめたのに。

奈津 途中でやめるん下手じゃけん。何となく大学まで続けた。タイムは全然じゃったけど。

敦志 泳ぐことあるんか、今も。

奈津 忙しいて、ね。

敦志 学年副主任、いうたか。

奈津 今年是一年生の担当で。担任のクラスもあるし。

敦志 次は主任、ほいで教頭か。

奈津 いや。教頭はないよ。

敦志 何で。

奈津 なりたいと思わんし。

敦志 何で。

奈津 ちよつと。

敦志 うん。

奈津 考えた。お見舞いに行くようになって。

敦志 沙希江の。

奈津 うん。

敦志 考えたて、何を。

奈津 残りの時間。

敦志 ああ。

奈津 忙しい忙しい言いよるうちにほんとのおばあさんになるけん。

敦志 ほうじゃの。

奈津 体動かしたい、て思た。スポーツしたい、て。罰当たるね。

敦志 何で。

奈津 沙希江ちゃんのベッドの横で、行くたんに瘦せていく沙希江ちゃん見て、そう

思た。

敦志 ああ。

奈津 顔立ちも変わってしもて。骨と皮みた
いになって、沙希江ちゃん。亡くなる前の
日に、ご主人がメールで知らせてくれて。
ほかに友だちもいませんからって。年休取
って飛んで行ったら、もう話もできんよう
になっとって。でもあなたが来てくれて嬉
しそう、だって。声でわかつたんだと思
ますって。私にはもう表情も見分けられん
かったけど。ご主人はずっとベッドのそば
に座って、沙希江ちゃんの頭を撫でて。沙
希江ちゃん、もう口はきけんかったけど、
何か一所懸命、ご主人に訴えよった。次の
日、メールがきた。亡くなつたって。それ
がおとといのこと。

水の音。

奈津 沙希江ちゃんは、もう、いって、しも
た。

水の音。

奈津 敦志。

敦志 何。

奈津 来てくれる。

敦志 え。どこに。

奈津 お見舞い。

敦志 誰の。

奈津 私の。

敦志 お前の。

奈津 うん。

敦志 お前。

奈津 え。

敦志 悪いんか、どっか。

奈津 あ。いや。もしも、の話。

敦志 もしも。

奈津 もしも私が重い病気になったら。

敦志 何じゃ。

奈津 何じゃ、て。

敦志 びっくりするじゃろ。

奈津 何が。

敦志 いや。

奈津 心配してくれる。

敦志 当たり前じゃろ。

奈津 ほんなら来てくれる、ね。お見舞い。

敦志 生きとつたら。

奈津 は。そんな時に。ワシが生きとつたら。

敦志 何、何よ。どっか悪いん、敦志こそ。

奈津 まあ。

敦志 え。え、病院に行ったん。

敦志 いや。別に。

奈津 敦志。

敦志 何。

奈津 ちゃんとして。病院。

敦志 何で。

奈津 何で、て。

敦志 何でもないよ。

奈津 嘘。

敦志 ほんと。

奈津 嘘。

敦志 ほんと。

奈津 ほんとに病気なん。

敦志 いや、ほじゃけん。病気、じゃのうて。

奈津 ばかばかばか、敦志の大ばか。もうわ

敦志 けわ

奈津 こつちがわけわからんよ。

敦志 敦志。

奈津 何。

敦志 敦志。

奈津 ほじゃけん、何。

敦志 死なんといて。

奈津 え。

敦志 死なんといて。私より先に死なんとい

奈津 て。

敦志 ああ。

奈津 頼むけん。

敦志 わからんよ、そがなこと。

奈津 約束して。

敦志 約束はできんけど。

奈津 約束して。後で破ってもええけん。約

束は、して。

敦志 どうかしたんか。

奈津 え。

敦志 急に、そがな。

奈津 怖なったんよ。

敦志 え。

奈津 怖かった、さつき。

敦志 何が。

奈津 怖うてたまらんかったんよ。

敦志 ほじゃけん、何が。

奈津 残されるんが。一人で。

敦志 ああ。

奈津 沙希江ちゃんは、もう、いって、しも

た。

水の音。

奈津 楽しかったんかな、沙希江ちゃん。

敦志 え。

奈津 プールのはたに一人で立って、ストツ

プオツチ持って、人のタイム取るだけで。

敦志 ああ。

奈津 私らと一緒に水泳部におって、ほんと

に楽しかったんかな、沙希江ちゃん。

水の音。

奈津 敦志は。

敦志 え。

奈津 怖ない。

敦志 何が。

奈津 (カウンターの内側を指して) そこに

立つとることが。

敦志 は。

奈津 ずっと一人で。これからも。

敦志 ああ。

奈津 ほいで一人で死ぬことが。

敦志 うん。

奈津 怖ない。

敦志 うん。ほいでも。

奈津 え。

敦志 待ちよつてくれる人、おるし。

奈津 あ。

敦志 うん。

奈津 (少し力なく) ほうなん。

敦志 うん。

奈津 (力なく) どこに。その人。

敦志 あの世。

奈津 は。

敦志 待ちよる。

奈津 誰が。

敦志 姉ちゃん。

奈津 え。

敦志 うん。

奈津 敦志、姉ちゃんおったん。

敦志 うん。

奈津 あの世、て。

敦志 さつき言うたじゃろ、お前。

奈津 え。

敦志 何でうちの村にあんな立派なプール

奈津 あったんか。

敦志 言うたけど。

敦志 大川で泳ぎよつたらしい、プールがで

奈津 きるまでは。

敦志 ああ、聞いたことがある。

敦志 聞いたことないか。溺れて死んだ子が

奈津 おるて。

敦志 え。いつのこと。

敦志 ワシらが三つするとき。

奈津 初めて聞いた。

敦志 ほうか。

奈津 誰が溺れたん。

敦志 あ、うん。いや。

奈津 何。

敦志 姉ちゃん、ワシの。溺れて死んだ、川で。

奈津 え。

敦志 小そうて、ワシ。よう覚えてないんじゃないけど。

奈津 ほうじゃったん。

敦志 うん。

奈津 お姉さん、泳ぎよつて。

敦志 それもようわからんのじゃ。

奈津 ああ。

敦志 姉ちゃんが溺れて、村はプールを造る

ことに決めたんじゃ。

奈津 知らんかった。

敦志 奈津。

敦志、カウンターから出る。

奈津 何。

敦志 行くな。

奈津 え。

敦志 どこにも行くな。

奈津 どしたん、急に。

敦志 いや。

水の音。

敦志 人が大勢うちに来て。たぶん葬式の記

憶じゃ。それまでおつた姉ちゃんがおらん

ようになつて。夕方になつても夜になつて

も帰つて来ん。お袋は毎日泣いて。姉ちゃ

んのこと、お袋に聞いたらいかん、いうん

はわかったけど。ワシは、ずーっと待ちよ

つた。次の日もその次の日も。姉ちゃんの

こと。おるとこはわかつた。水の底じ

や。

奈津 え。

ゆっくりと照明が落ちる。

水の音。ぽったり、ぽったり。

敦志 姉ちゃん。ぼくが。ついて行ったけん
じゃろ。一緒に遊んで、いうて。泣いて、
追わえていった。姉ちゃん、友だちと遊び
たかったのに。ちよつとごまかすつもりで、
大川に入ったんじゃろ。

ぽたり、ぽたり。ぽたり、ぽたり。
川の流れる音。

敦志 母ちゃんに絶対行くな、言われたけど、
ぼく、小学校に上がってから内緒であの川
に入ってみた。浅いつもりで入ったら、急
に深なつとつて。
奈津 敦志、敦志。

水の音、大きくなる。そして次第に
小さく。店内次第に明るく。

奈津 敦志。

水の音。

敦志 (ひとりごとのように) よう似とつた
んじゃ。

奈津 え。

敦志 沙希江が、タイムよみ上げる声。

奈津 は。

敦志 何か、とろーんとした声じゃったろ。

奈津 ほうかいね。

敦志 うん。

奈津 似とるて、誰の声と。

敦志 姉ちゃん。

奈津 声は、覚えとるん。お姉さんの。

敦志 何とのおう。

水の音。

敦志 沙希江はの。
奈津 え。

敦志 水の音が好きじゃった、て。プールの。

奈津 え。

敦志 大川のはたじゃったろ、あいつの家。

奈津 ああ。

敦志 生まれる前から聞きよった気がする、て。お母さんのおなかの中で。

奈津 聞こえんけど、ね。泳ぎよるときは。意識せん、いうか。

敦志 ほじゃけんマネージャーになったんじゃ、沙希江は。選手じゃのうて。

奈津 あ、ほうか。

敦志 うん。

水の音。

奈津 思い出すね。

敦志 え。

奈津 真夏の、もうちよつとで練習が終わるいうとき。夕日がプールに射して、山のきわが夕焼けで赤うに染まって。沙希江ちゃんのタイム読みあげる声が響いて。体はだるいんじゃけど、あとちよつとだけががんばろーて思う、あの感じ。

敦志 ああ。夕焼け。

奈津 うん。夕焼け。

敦志 知つとるか。

奈津 え。

敦志 プールに頭まですっぽり浸かるじゃろ。

奈津 うん。

敦志 目え開けて上を見たら。

奈津 何。

敦志 何かが水面に映って揺れよる。

奈津 え、何。お化けとか。

敦志 お前の場合はそうかもな。

奈津 は。

敦志 人の顔、みたいなもんが揺れよる、水面に。

奈津 わ。

敦志 姉ちゃん。

奈津 敦志。

敦志 そこに姉ちゃんがおる、と信じとった、
小さい頃は。

奈津 ああ。

敦志 ほじゃけど、ある時。

奈津 え。

敦志 気づいた。

奈津 何。

敦志 自分の顔じゃった、それは。

奈津 え。

敦志 自分の顔が映って揺れよるんじゃ。水
面に。

奈津 それ、ほんと。

敦志 試したことないか。

奈津 初めて聞いた。というか、今なんかヒ
ドイことも言われたような。

水の音。

敦志 ビールでも飲むか。

奈津 え、あるん。

敦志 あるよ。メニューにも。

奈津 やっぱりやめとく。

敦志 何で。

奈津 しまいまで酔わずに送りたいけん、今
日は。

敦志 え。

奈津 沙希江ちゃんのこと。

敦志 ああ。ほうじやの。

奈津 それにまた電話かかってくるかも知
れん。学校から。

敦志 こんな夜遅うにか。

奈津 うん。事件が起こったばかりじゃし。

敦志、水差しから二つのグラスに水
を汲み、一つを奈津に渡す。
水の音。

奈津 好きじゃ、私。

敦志 え。

奈津 この水の音。

敦志 ああ。

奈津 うん。

敦志 そう言いよった。あいつも。

奈津 え。誰。

敦志 沙希江。

奈津 え。

敦志 うん。

奈津 来たん、ここに。沙希江ちゃん。

敦志 うん。

奈津 四年前の夕方。夏の終わり頃。

敦志 知っとったん、沙希江ちゃん。敦志の

店。

敦志 いや。

と、笑う。

奈津 何。

敦志 雨宿りじゃて。

奈津 敦志の店と知らずに。

敦志 そう言よった。

奈津 そいで。

敦志 そこに座って一杯だけ、うまそうに飲

んで。ワシのコーヒー。

奈津 そいで。

敦志 そいだけ。

奈津 四年前。病気がわかった頃じゃね。

敦志 あいつ、言うてなかつた、そがなこと。

と、グラスの水を飲む。

水の音。

奈津の携帯が鳴る。

奈津 はい、田島です。

勤務先の高校から。学校に戻るよう

に、と。

奈津 はい、ええ。わかりました。すぐに戻ります。

と、携帯を切る。

敦志 車呼ぶか。

奈津 駅でタクシーつかまえる。その方が早いし。

敦志 駅まで送ろわい。

奈津 ええよ。近いし。

敦志 ほいでも。夜じゃし。

奈津 (強く) いらん世話じゃ。

と、立ち上がりグラスの水をごくごく
くと飲み干す。

水の音。

奈津、階段を上りながら、

奈津 見送られるんはあんまり好きじゃな
い。

敦志 ほうか。

奈津 敦志。

と、振り向いて、

敦志 え。

奈津 敦志にはやっぱり待ちよって欲しい、
ここで。

水の音。

奈津 ね。

敦志 何ぞ。

奈津 またここに来てもええ。

敦志 当たり前じゃろ。

奈津 ほんとに。

敦志 待ちよるけん。

二人、見つめ合う。
水の音、大きくなる。溶暗。

(終わり)

* 印は島崎藤村「椰子の実」より。